



# 男の居場所

福島県伊達市在住  
写真家・青柳陽一宅

開高健さんと釣り仲間でもあった写真家、青柳陽一さんのお部屋は釣り道具、映像編集機器、カメラ、ナイフなど遊び道具がいっぱい。それはまるで、大人の子供部屋だった。

撮影・佐藤澄男

現在、夫人と、去勢した雄猫と三人(?)で暮らす青柳陽一さん。猫の名前「ハナ」は、娘さんが名付けた。青柳さんとは、鼻と鼻を付ける「NZ式」挨拶のキスまでする程の仲。この部屋の中に、映像編集機器、カメラ類、釣り具類、撮影機材など、青柳さんの宝物が、どっさり格納されている。

「男は、どこかにこだわりを持つ。モノを集めることが、行動することか、何かのめり込むことか。これは父親からの遺伝子である場合と、子供の頃の出会いの経験と、大人になつてからの体験などにより、違うのかもしれない」と青柳さん。はたして、外科医だった父親から蒐集のDNAを受け継いだ青柳さんの場合とは。部屋を見ることで見えてくる、その人となり。

## プロ写真家にしてMINOXにハマる

父は医者だったが、クラシックをSP盤で聴き、模型機関車を走らせ、終戦直後復員してきたら、写真を撮り、手術室の横の暗室で現像引き伸ばしをやり始めた。私は、中学生のころから暗室を手伝ううちにこれが生涯の仕事だと、子供心に感じた。それほど、映像の現われる瞬間にワクワクさせられたのだ。

ついに医者にならずに、写真家になってしまったのも、この体験、経験からだ。父が、写真に興味を示さなかつたら、当然医者になっていたはずで、子供時代の感動が人生の道を変えてしまった。

一九六六年、ロスのシェーファーカメラ店で出会ったMINOXという超小型カメラに心を奪われた。小指の爪程のフィルムで、写真が撮れる。

プロの写真家が興味をもつような代物ではないのだが、これが自分で現像、引き伸ばしも出来、いたく気に入ってしまった。そのころ、テロ甚だしいブラジルで、MINOXのお陰でドップス(秘密警察)に逮捕されたりという、貴重な経験もした。(←)





# こだわりが凝縮された青柳ルームに潜入!



**【カメラ】** 仕事用ペンタックス 35mm と 645 の一部のカメラとレンズ。これらは、ペンタックス専用レンズ以外で、すべて中古レンズ。真ん中の長いレンズは、ガンホルダーと同じ肩当てが付いた NOVOflex 製超望遠レンズ。これらのレンズはデジカメにも使用可能だ



**【映像編集】** 昔、子供たちを撮った8mm映像などをDVDに再編集するなどしている。座った状態で手の届くところに機材を配置した。映像、音源の編集で、レーザーディスク、VHSビデオ、8mmビデオ、LPレコードなどからDVD、CD化



**【ナイフ】** 真ん中の赤い布にある3本のナイフは、開高健さんがDVD「河は眠らない」で使用した。すべて、私のデザインしたこれらは、「キーナイフ・コディアック・イリアムナ」と名づけたナイフだ



**【毛鉤／リール】** 現在まで、釣れた毛鉤の収納箱は手先の器用なデザイナーからのプレゼントで、手製。Fly Fishing用とテンカラ用毛鉤を収納。カメラケースに入ったリール。ひとつだけ出ているのがスウェーデン製



**【書棚】** よく読む本を前後2重で開閉可能な書棚に収納。これで収まりきらないので、他に9つの書棚を使用。(右)背の高い写真集は、特製書棚に別に収納している。(中央)以前読んだが、再度というもある(左)釣り関連を集めて収納。



**【ゴーヤ】** 工夫は部屋の外にも。部屋の編集机を外から見た。この部屋は南向きで、日当たりが良過ぎて本が焼けてしまうので、庭にゴーヤを植えて日除けにした。屋外から撮影し、ゴーヤの葉を前ボケに写したのが、この写真



**【MINOX】** Minoxカメラは、8×11mmのフィルム使用の、超小型カメラ。中央は、Minoxで撮った作品群。現在、Minox A & B & C を使用中。Book-E-03 の DURSTM 601 は、Minox から6×6まで引き伸ばし可能な伸ばし機。



**【毛鉤を巻く】** Fly Fishingの毛鉤は、すべてこの作業機で巻く。羽根や糸などなどのマテリアルや道具類はすべて、青柳氏の前に置かれた箱に入っている。これは、アメリカで購入した非常に便利な、収納グッズ。この細々とした作業が楽しい



**【軍払い下げの机】** 映像や音声の編集、パソコンなどをやる机。朝鮮戦争で米軍将校が使用した野戦用。天板が蓋になり、たたむとサイコロ状の箱に変化するから、非常に便利に収納引き出しも多い。「50年前、岩国基地近くの米軍放物店で、確か200円

一九六四年に始めた、岩魚釣りの記録にはこのMINOXが欠かせない存在となった。

## 岩魚釣りとはキャンプ、そして四輪駆動車

釣りを通して、キャンプ用グッズもアメリカに行くたびに替え揃えたが、当時日本ではこれらは手に入り難かった。キャンプでは、料理をすることが必須。そのグッズ、ナイフとかタッチオーブン、ストーブの数々も心をくすぐる品々となった。一九七二年、岩魚釣りに買ったジムニーLJ20・360ccから、四輪駆動車のおもしろさを教えられ、今でもパジェロとともに大切にしている。釣りも餌釣りから毛鉤釣りに代わり、その毛鉤制作グッズの種類が多さにアメリカ行きが楽しくなった頃だった。

人それぞれだが、趣味は人生に癒しと希望と活力を与える。つまらないこだわりと言うなかれ、私にはそれがまた仕事に結び付くのだ。

私は、岩魚を通して小説家・開高健さんと知己を得た。

小説家も釣りを愛し、モノへのこだわりはABUというスウェーデン製のリールとロッドだった。しかし、彼は

惜しげもなくこれらを人に与えたから、蒐集癖は無いようだ。その小説家の著作、写真集がまた素晴らしい。本は、時に頭が混乱したときなどの大いなる、助けとなった。

私の場合、コレクターではなく、すべて使用する為の蒐集集で、道具の面白さに魅せられている。諸君、何でも良いが、ひとつの事に突き進み、視野を広げて遊びの世界に浸ることを推奨する。

これぞ、人生。これぞ、父ちゃん坊やの世界である。

(文・青柳陽一)

あおやぎ、よついで  
一九三八年福島県生。広告写真とポートレート、ヌードなどを撮影。伝説のグラフィックアイドル、青木奈美のヌードは、世の男性ファンたちの熱い支持を集めた

## 「岩魚が呼んだ」



現在は、奥鬼怒岩魚保存協会の最高顧問も務める青柳氏。写真家として駆け出しの若き日に、奥鬼怒の岩魚釣り名人との出会いが氏の運命を変える。開高健、そしてなんと、寛仁親王ら持つた人々との、岩魚が取り持つ不思議な縁を綴る。(こま書房、二〇〇〇年)